

平成二十三年 度

和歌山信愛女子短期大学附属中学校

入学試験問題 前期日程

国語

受験上の注意

- 一 問題用紙は1～17ページまでです。
開始のチャイムが鳴ったら確認して始めなさい。
- 二 受験番号は、問題用紙と解答用紙の両方に書きなさい。
- 三 終了のチャイムが鳴ったら、問題用紙の上に解答用紙を
開いたまま裏返しておきなさい。

〈解答は、句読点や記号も一字分と数えて記入すること。〉

受験番号

【一】 次の問いに答えなさい。

問一 次の _____ 線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① イツソウの努力が望まれる。
- ② 厳しいクチャウで注意をする。
- ③ 課題曲をアナンにこなす。
- ④ 洗濯したてのセイケツなシャツ。
- ⑤ あの女優はエンギがうまい。
- ⑥ シンコキョウをして舞台に上がる。
- ⑦ 薬がキいて熱が下がった。
- ⑧ 父は昨年、現役をシリゾいた。

問一 次の①～⑤の熟語と同じ組み立てになっている熟語を、後のア～カの中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 幸福 ② 往復 ③ 残雪 ④ 植樹 ⑤ 人造

ア 旅人 イ 連続 ウ 未納 エ 集金 オ 国有 カ 主従

問二 次の文の _____ 線部を正しい表現に直しなさい。

- ① わたしの夢は、保育士になりたいです。
② わたしは、彼の言葉を聞いて不快感を感じた。
③ 先生は、いつ、わたしの家にうかがいますか。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 リアス式海岸特有の、波静かな入り江が続く宮城県沿岸は、広島県と並ぶ日本有数の※カキの産地である。宮城県がなぜカキの産地なのかといえは、いかだを浮かべられる静かな湾が多いことによるのはもちろんだが、種ガキ（カキの稚貝）の世界的産地でもあるからだ。この種ガキは、北上川河口の石巻湾で多くとれるので、宮城種と呼ばれている。それは、成長が速く、味もよく、病気に強いという三拍子そろった優良種で、北海道、岩手、三重、岡山など国内はもとより、フランスやアメリカで養殖されているカキも、実は、そのほとんどが宮城種なのである。気仙沼湾でカキの養殖業を営むわたしも、1もちろん宮城種を用いている。

2 意外に思われるかもしれないが、あるできごとによってわたしはつくづく森のありがたきを感じ、六年前から仲間と気仙沼湾に注ぐ大川上流の室根山に広葉樹を植林し続けている。それは、一九八四年にフランスへ行った時のできごとがきっかけだった。

3 地中海に注ぐロース川河口のラングドッグ地方、ジロンド川河口のマレンヌ・オレロン地方と、フランスを代表するカキの産地を見学しているうちに、わたしは、しだいに胸が高鳴ってくるのを感じていた。それは、3フランス最大の大河、ロワール川河口の大都市ナントでクライマックスを迎えた。日本では、「垂下式」といって、いかだにカキをつり下げて養殖しているのだが、フランスでは「地蒔き式」といって、※干潟に直接カキを蒔いて育てている。A、養殖場の見学には潮が引くのを見計らって行ったのだが、干潟に降り立った時から、わたしにはある予感がしていた。

4 潮だまりには、ヤドカリ、カニ、タツノオトシゴ、イソギンチャクなどの小動物が、重なるようにしてうごめいていた。また、この河口では、なんと、シラスウナギ（うなぎの稚魚）が食料にするほどとれていたのである。シベルと呼ばれるシラスウナギのパイ皮包みがナントの名物料理だった。

5 ウナギが群れる川、それは川が健全な何よりの証拠である。ロワール川河口の干潟の潮だまりに群れる小魚や小動物、そしてシラスウナギ。それは、三十五年ほど前の宮城の海そのものであった。わたしは、さらにロワール川の流域も見学して回った。

6 ロワール川上流のトゥール地方東部は、広葉樹の大森林地帯で、プロワの森、リュシーの森、アンボワーズの森、シノンの森といった大森林が広がっている。それらの森からは、十本以上の支流がロワール川に注ぎ込み、水郷地帯を形づくっており、ロワール川は海へと注ぎ込んでいる。

7 それまで外海から入り込む沖合の海水が、カキのえさになる植物プランクトンを育ててくれるものばかり、わたしは思っていた。だがフランスで見た光景は、全く違う方向を示していた。森と海とはいったいどんな関係にあるのか。わたしはその時から考え始めたのだ。

8 海の食物連鎖は、植物プランクトンの発生から始まり、動物プランクトン、イワシ、サバ、……と続く。だから、植物プランクトンは海の生物生産にとって、底辺を支える最も大事な生物ということになる。B、植物プランクトンの成長に必要な養分はどこから運ばれてくるのだろうか。太田川が注ぐ広島、北上川河口の宮城、ミシシッピ川河口のニューオリンズ、ジロンド川河口のマレンヌ・オレロンなど、カキの産地は必ず河口である。これは、川が植物プランクトンを育てる養分を運んできていることを示しているのではないだろうか。

9 だが、川が養分を運んでくるということだけで、森と海との関係をとらえることができるのか。こうした問題は、学問の世界ではまだ手つかずの状態だと思っていた。C わたしは、そのメカニズムを解明しようとしている北海道大学水産学部の松永勝彦教授にめぐり合うことができたのだ。

10 5教授の研究を要約するところである。植物プランクトンは、基本的には二酸化炭素、水、太陽の光で増えるが、そのほかにチツソ、リンなどの養分が必要である。特にチツソは、タンパク質をつくるのに欠かすことができない養分である。ところが、植物プランクトンは、先に鉄を体内に入れておかないと、チツソを取り込めない構造になっている。さらに鉄は、クロロフィルな

どの光合成色素の生成に深くかかわっているというのだ。

㊦ では、鉄はどこから、どのように供給されているのだろうか。

㊧ 沿岸域の鉄の供給源は森である。鉄が海に届くには水に溶けなければならない。ここで森の腐葉土が重要な役割を担っている。

腐葉土は、それ自体植物にとって最良の肥料であるが、山の岩石や土に含まれている鉄を水に溶かし、植物プランクトンが吸収しやすい形に変える役目をしているというのである。

㊨ さらに、気仙沼湾とその湾に注ぐ大川を調査した結果、湾の生物をはぐくむ養分の半分以上が、大川によってもたらされていることが判明した。

㊩ 一九八九年九月に、海から遠く離れた室根山には、時ならぬ大漁旗が何百枚とひるがえった。

㊪ 山に大漁旗とは意外な光景であるが、それは、森に対する漁民の切なる感謝の表れで、森、川、海、と続く自然の中でしか生きられないことを悟った気仙沼湾の養殖漁民たちの植林風景だったのである。そこには、保水力があり、良質の腐葉土ができる落葉広葉樹が植えられた。植林は毎年続けられ、今ではその数も八千本を超えた。その地は「カキの森」と命名されている。漁民による植林がきっかけとなり、上流の森の民と下流の海の民との交流が深まっていた。室根村の人々は、なるべく農薬を使わない環境保全型農業に取り組むようになってきた。そのためばかりでもないと思うが、うれしいことが起こり始めた。二十五年ほど前から姿を消していたメバルが、気仙沼湾に再び姿を見せるようになってきたのである。

㊫ 6 森の民と海の民との努力が実を結び、きつと今年も美味なカキがとれることだろう。

(室根山重篤の文章より)

注 ※ カキ…二枚貝の一種で、浅い海の岩などにつく。

※ 干潟…遠浅の海岸で潮が引いた時にあらわれる砂地。

問一 線部 a と d の漢字の読み方をそれぞれ答えなさい。

問二 A C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア では イ つまり ウ しかし エ だから

問三 線部 1 「もちろん宮城種を用いている」とありますが、筆者はなぜ「宮城種」を用いているのですか。その理由を説明しなさい。

問四 線部 2 「意外に思われるかもしれない」とありますが、どのようなことが「意外」なのですか。説明しなさい。

問五 線部3「フランス最大の大河、ロワール川河口の大都市ナントでクライマックスを迎えた」とありますが、このときの筆者の気持ちの説明として、最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 潮だまりに重なるようにうごめいているヤドカリなどの小動物を見て興奮している。

イ いくつもの大森林がロワール川の上流に広がっていることを不審に思っている。

ウ 日本とは異なり、フランスではカキを干潟に地蒔きしていることを不思議に思っている。

エ ロワール川が昔の宮城の海と同じくらい生き物が豊富であることに感動している。

オ フランスを代表するカキの産地であるロワール川河口を見学できることに緊張している。

問六 線部4「フランスで見た光景は、全く違う方向を示していた」とありますが、筆者はどのようなことに気がついたのですか。本文中の言葉を使って、筆者の考えの変化が分かるように解答らんのかたちに合わせて八十字以内でまとめなさい。

問七 線部5「教授の研究を要約するところである」とありますが、その教授の研究結果が分かるように、次の文を順番に並べ、記号で答えなさい。

- ア 植物プランクトンが鉄を吸収する。
- イ 植物プランクトンが増える。
- ウ 腐葉土が岩石や土に含まれる鉄を水に溶かす。
- エ 植物プランクトンがチツソを体内に取り込む。
- オ 川が鉄を河口に運ぶ。

問八 線部6「森の民と海の民との努力が実を結び」とありますが、森の民と海の民が努力していることをそれぞれ二十字以内で答えなさい。

問九 本文の内容から全体を四つの段落に分けるとすると、正しいものは次のうちどれですか。一つ選び、記号で答えなさい。

ア ① / ②～⑥ / ⑦～⑯ / ⑰～⑳

イ ① / ②～⑧ / ⑨～⑰ / ⑱～㉑

ウ ① / ②～⑧ / ⑨～⑰ / ⑱～㉑

エ ①～④ / ⑤～⑦ / ⑧～⑰ / ⑱～㉑

オ ①～④ / ⑤～⑯ / ⑰～⑱ / ㉑～㉒

【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

あのクリスマスツリーが欲しい、と子どものわたしは a 駄々をこねていた。

b 泣きたさんばかりに言っていた。教会の厚い木製の扉の横に、①みことなツリーが飾っており、金色のオーナメントが輝いていた。

「あんな②立派なツリーは無理よ。小さなツリーなら、一緒に飾りましょう」

母は言った。

なぜわたしは、大きなツリーがあんなにも欲しかったのだろう。当時の小さな家には不釣り合いな③大きなツリーを欲しかった。

その夜、 小ぶりのツリーで納得したわたしと母は、ツリーに飾りつけをした。

椅子をもってきて、母は天井にも④きれいな緑色のモールをつるし、そこからも金紙や銀紙でできた星や長靴を下げた。

手が届かないので椅子の上で 背伸びをする母の足の裏を、椅子の背もたれをしっかりと押さえながら、わたしは見ていた。

それからわたしは、 Bの鉛筆でサンタクロースへの手紙を書いた。

一番欲しいものは、ピアノだった。学年に一人か二人、ピアノのある家の子がいた。わたしたちは、そのピアノが見たくて、ツアーを組んでは訪ね歩いてきた。

母はピアノの音色が好きだった。自分もできたら習いたいと言っていた。その頃、母が持っていた楽器といえば、大正琴と一張の琴だった。ラジオから流れてくる曲を聴いて、すぐに大正琴で再現してみせる母だった。、そんな時間の余裕があるのは休日だけだったが。

それにしても、この小さな家の、どこにピアノを置くの？ そんなことは考えなかった。

母が切り詰めながら暮らしていることも、わたしは知っていた。それでもクリスマスのプレゼントに欲しいのはピアノだった。母には負担はかからない。かかるのはサンタクロースそのひとなのだから。

「サンタクロースさま。今度のクリスマスにはピアノをください」

わが家に煙架がないことが不安だったし、煙架があつたところで、どうやってサンタクロースがピアノを運び込むのか疑問だったが、サンタである、なんとかしてくれるに違いない……。わたしはそう思っていた。

十二月二十五日の朝が来た。

枕もとには、自分のその何倍もある赤い毛糸の大きなソックスがひとつ。中には、たくさんの球根が入っていた。ピアノが球根になつてしまったのだ。

「ピアノじゃない」

わたしは叫んでいた。

「「どうして？ ピアノつて書いたのに」

母がそのことに対してなんと答えたかは覚えていない。

巨大なソックスに入っていた球根をひとつひとつ取りだしては畳の上に並べて、2母が大きな声で球根の説明をはじめたことだけは覚えている。

これはヒヤシンス、こつちの小さいのはクロッカス。これはチューリップよ、と。

一緒に小さな庭に植え込んで、一緒にお水をやって、花を咲かせましょう……。そんなことを母は楽しげに言っていた。

図書館でそれぞれの球根について調べてみるとおもしろいよ、とも言っていた覚えがある。

わが家にはいま植物図鑑が何冊もある。新顔の植物がわが家にやってくると、どうしてもその植物をもっと知りたくなって、求

めてしまう凶鑑や園芸の本である。この癖は、あの当時についたのかもしれない。

どんなつらい状況にしても、それをどこかでちよつと楽しんでしまう……。母にはそんなところがあった。

笑うことも笑わせることも母は好きだった。

なかなか容易に笑い飛ばすことのできない人生そのものを笑うような気分で、母は笑っていたのだろう。数少ない写真の中の母は、いつも気持ちいいほど大きな口をあけて笑っている。

笑うと、頬に深いえくぼが刻まれたひとである。

「謝りに行こう、先生に」

母が言った。

中野区の神明小学校に転校して間もなくのことだった。

担任は三島先生という年配の女性だった。ショートカットで、てきぱきしたその先生がわたしは好きだった。

ある日のこと、わたしは宿題を忘れた。何の宿題だったかは忘れてしまったが。

先生が机の上に宿題を広げるように言つて、机の間を歩いて見てまわっていた。やばい、忘れた。大好きな先生の宿題をやるのを忘れた。わたしは考えた。そして、ひとつの嘘を思いついた。母がもつとも嫌いな嘘だった。

三島先生がわたしの机の横に立たれたとき、わたしは平然と言い放っていた。

「やった宿題を忘れました」。なんたる嘘つき。宿題が出たことを忘れていたくせに。

先生は「そう」とだけ言つて、次の机のほうに行つてしまった。嘘をついた重さだけがその日一日中、心にはたまっていた。

母が会社から帰ってくるのを待つて、おそるおそるわたしは事実を告げた。突然、わたしが正直な子になつたわけではなく、ひとりで背負いきれなくなつただけだろう。重さの半分を母に分けたかつた、というのが、本当のところだと思ふ。

そのあと、母と一緒に家を出た。いつもの朝は寄り道をして、家々の犬たちと遊んでから向かった学校であつたけれど、その夕暮れは一直線に学校だつた。学校にはすぐに着いた。

職員室には明かりがついていた。

校門の前で、母は言った。

「ここで待っているから、ひとりで行ってきなさい」

ずっと母と一緒に来てくれるものだと思つていた、わたしは戸惑つた。

「あなたがついた嘘なのだから、あなたが謝ってくるのよ」

3 こういうときの母は、容赦がなかつた。泣いても懇願しても、一緒には来てくれないとわたしは知つていた。

校門から職員室にたどり着くまで、長い長い時間を要した。途中で振り返ると、母が校門のところに立っているのが見える。立っている母は、「早くおいき」と言つているように見えた。

十数分後、その校庭を、わたしは三島先生と並びながら、今度も4 一直線に母のもとに急いでいた。

手の平には、カバヤのキャラメルがあつた。先生がくれたものだ。

三島先生はわたしの嘘に気づいていた。そして、嘘はつかれたほうだけではなく、ついたほうをさらに苦しめるという短い話を
して、5 それからキャラメルをくださったのだ。

校門のところで会つた先生と母が大人の話をしていた。

それから母とわたしは家に戻つた。今度は一直線ではなく、近くの文房具屋さんや花屋さんに寄つての帰り道となつた。

6 キヤラメルはとても甘かつた。

(落合 恵子『塵つぷちに立つあなたへ』より)

問一 〱線部 a 「駄々をこねていた」、b 「泣きださんばかりに」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

a 「駄々をこねていた」

- ア 顔を真っ赤にしておこった
- イ 思い通りにならずくやしがつた
- ウ わがままを言つて困らせた
- エ どうしようもなくうらやましがつた

b 「泣きださんばかりに」

- ア 泣きそうなぐらいに
- イ 泣き出すふりをして
- ウ 大声をあげて泣きわめいて
- エ 泣き出してしまわないように

問二 〱線部①「みごとな」、②「立派な」、③「大きな」、④「きれいな」の中から品詞の違ちがうものを一つ選び、記号で答えなさい。

問三 A C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

ア もつとも イ さらに ウ ようやく エ かえつて

問四 ———線部1「どうして？ ピアノって書いたのに」とありますが、このときの「わたし」の気持ちを説明しなさい。

問五 ———線部2「母が大きな声で球根の説明をはじめた」とありますが、このときの「母」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア どの植物の球根かを植物図鑑で調べることで、勉強を好きになつてもらいたいという気持ち。
- イ 「ピアノが欲しい」という無理な願い事を言う「わたし」に対して、腹をたてる気持ち。
- ウ 願い事をきいてやれない母親としての無力さをなんとかごまかしてしまおうという気持ち。
- エ 友達が持っているからといって、ピアノを欲しがる「わたし」を情けないと思う気持ち。
- オ 「わたし」を元気づけ、願い事がかなわなかったことを前向きに受け止めさせようという気持ち。

問六 ——線部3「こういうときの母は、容赦がなかった」とありますが、このときの「母」の考えとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分のしたことには自分で責任をとるべきだ。
- イ 一度と悪いことをしないように厳しく罰すべきだ。
- ウ 転校したばかりなので「先生」に気に入ってもらうことが大事だ。
- エ 一人でなんでもできる優等生になってもらいたい。
- オ 「わたし」といっしょに「先生」に謝るのはいやだ。

問七 ——線部4「一直線に」とありますが、この表現から読み取ることのできる「わたし」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 今まで校門で待つてくれた母に感謝する気持ち。
- イ 大好きな先生と一緒になのでうれしいという気持ち。
- ウ 問題を無事に解決できたので早く帰りたいという気持ち。
- エ 一刻も早く母に結果を伝えたいという気持ち。
- オ 母の機嫌が悪くなったらどうしようと心配する気持ち。

問八 —— 線部5「それからキャラメルをくださったのだ」とありますが、「先生」がキャラメルをくれたのはどういう気持ちからですか。説明しなさい。

問九 —— 線部6「キャラメルはとても甘^{あま}かった」とありますが、この表現から「わたし」のどのような気持ちを読み取ることが出来ますか。十字以内で答えなさい。

受験番号

--

【一】

問一	①	②	③	④	⑤
問二	⑥	⑦	⑧		
		いて	いた		
問三	①	②	③	④	⑤
	①			②	
	③				

【二】

問一	a	む	b	ぐ	c	らつて	d	れる
問二	A	B	C					
問三								
問四								
問五								
問六								
問七	() → () → () → () → ()						に気づいた。	
問八	森の民							
問九	海の民							

【三】

問一	a	b	
問二			
問三	A	B	C
問四			
問五			
問六			
問七			
問八			
問九			

【二】 次の問いに答えなさい。

問一 次の 線部①～④の漢字の読みをひらがなで答えなさい。また、 線部⑤～⑧のひらがなを漢字に直しなさい。

- ① 総理大臣が組閣する。
- ② タクシーに便乗させてもらう。
- ③ 広く門戸を開く。
- ④ 弟はすぐに弱音をばく。
- ⑤ 化学は父のせんもん分野だ。
- ⑥ ひんぷの差が激しい地域。
- ⑦ 人工えいせいの打ち上げに成功した。
- ⑧ 日本列島をしゅうだんする。

問一 次の例にしたがって、□の中に打ち消しの漢字を一字入れなさい。

(例) 可能 → 不可能

- ① 解決 ② 日常 ③ 平等 ④ 常識 ⑤ 反応

問二 次の文中の□はどこにかかっていますか。それぞれ記号で答えなさい。

- ① あらゆる ア都市に イ図書館は ウ必ず エあります。
- ② まるで ア太陽のように イ明るい ウ人だ。
- ③ あの ア細く イ暗い ウ道は エどこに オ続くのか。
- ④ いくら ア時間が イかかっても ウかまわないから エがんばりなさい。
- ⑤ いつのまにか すっかり イ太陽が ウ西に エ傾^もいて しまった。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「又森が荒れる」ということばを聞くようになって、もうどれくらいの時間が経つただろうか。森が荒れる、という語にはふたつくらいの意味がありそうだ。ひとつはスギやヒノキを植林したものの、そのまま放置されてしまった状況^{まほう}をさしている。植林の後、手入れされることなく放置され、林床^{しんしど}には下草が生い茂り、下のほうの枝は汚^{きた}く枯れ上がり、さらに幼樹が枯れてできた

空間には「雑木」がはびこる。森が荒れるとはそのような状況をさす。要するに、「北山杉」の美林、「秋田杉」の美林といわれたような、林業家の魂^{たましい}のこもった森が失われてきたというのだ。これはまさに雑草だらけの田に起きていることと同じである。

もうひとつ、森が荒れているというのは、竹林が拡大し、森を侵食している状況をさしている。とくに里に近い森では、それまでさほどでなかった竹林の拡大が著^あしいという。たしかに関西地方の山々を見てみると、そのことがおのずと実感さ^あれる。竹林の拡大は、ひとつには人びとが竹林にはいつてタケノコを採らなくなったからだといわ^あれる。むろんちゃんとしたタケノコを採ろうとすれば竹林にも手を入れ管理してやる必要があるが、今や人は管理はおろか身近な竹林のタケノコにさえ見向きもしなくなってしまった。そのために竹林は拡大を続けているのである。

さて、この①ふたつの状況には共通する原因がある。それは、人が森に手を入れなくなったことである。かつては杉林も竹林もどちらも人の手が加わった生産の場であった。よく手入れされたスギやヒノキの森はたしかに見た目にも美しく、日本の美として写真集などにも登場した。だがもともとそれらの森は季節の変化に乏^あしく、「春の新緑」や「秋の紅葉」のような変化を遂げるこ^あとがない。そのうえ、そこに生息できる昆虫や動物種も限られ、生態学的な意味からも歓迎される樹種とはいえないのである。

一方、タケには根が浅いという特徴^{とくちょう}があるため、竹林では山崩^{やまぶた}れが起きやすい。また、タケはしばしば他の植物との共存を拒^あ否し、純林を構成する。竹林の林床に草一本生えていない様を見たことのある人も多いだろうが、それはタケの葉に含まれる特殊^{とくしゅ}

な物質のせいである。そのために竹林内の多様性は減少し、タケノコ以外の森の恵みに乏しくなる。

②こうした特殊性の上に、最後の頼みであった③経済的価値に見向きもされなくなつて、杉林や竹林はいまや森の問題児にされてしまった。だが、森を荒らしたのは人のほうなのだ。森が荒れるというのは、本来人の手の入っていた森に、人の手が入らなくなつたことで起きた当然の結果で、「荒れる」というのは人の勝手な言い分である。杉林にしてみれば自然の法則にしたがつて、その土地にもっともふさわしい森に帰しようとしているにすぎない。竹林も同様である。人との関係を一方的に破棄されたことが引き金となつて、自然の法則に従つて拡大しているにすぎない。にもかかわらず、その森の変化が、人の目には汚く映つてしまったために、「森が荒れる」という言葉が生まれてしまったのである。

一方、今、原始の森にあつい視線が注がれる。

いく年か前の秋、私は念願かなつて白神の森を訪れることができた。「ブナの原生林」として有名になつたそこは、世界遺産になつたこともあつて、ここ何年か、訪れる観光客の数も大幅に増えたという。原生林などほとんど目にしたことのなかつた私は、その日が来るのを心待ちにしていた。原始の森という語や雑誌などが書きたてるイメージに想像を膨らませ、原始の森と縄文の森のイメージを重ねていたのである。

だが、白神の森で生計を立ててきた※マタギの工藤光治さんの話は、④私のイメージを打ち砕いてしまった。工藤さんによれば、
白神の土地はもろく、しばしば山崩れを起こすという。山崩れを起こした土地は裸地となつて草が生い茂る。ある種の山菜はこゝろいう地形を好んで生える。マタギの人びともそうした土地に生える山菜を、採りながらも護つてきた。A 採集にあつて株の一部を残すとか、切り口が腐らないように手当てをするという具合である。彼らはまた、山菜、キノコをはじめ、さまざまな物資を手に入れるために森に手を入れてきた。マタギの人たちは、白神の森をまったくの※アンタツチャブルの森として見てきたのではな

い。大事な資源の再生を考えながら森を育ててきたのである。それは、まったく人の手が入っていない原始の森ではない。そこはまさしく人の手の入った森——里山なのである。

だが、世界遺産に指定されたのは、「自然の森としての白神」である。自然遺産と銘打った以上、そこに人の手が加わることは許されない。B 白神も、その中心の部分では人の手を加えることが一切禁止されているという。C それではマタギの人びとの生活は護れない。マタギの人びとを含めて立ち入りや生業を禁止することで白神のブナの森が護れるというなら、それはそれでひとつの選択なのかもしれない。だが、マタギを含めた人びとの手を遠ざけることで、ブナの森は護れるのだろうか。⑤私はそこに疑問を抱いている。もつというなら、白神のブナの森を原始の森と位置づけることの正当さを、私は疑ってみたいのである。

私たちは、ともすれば人間と自然とを機械的に対立させ、自然を護るということ、人を排除することだと考えがちである。自然のなかには、人間を寄せつけない自然があるのも確かだろう。だが「自然」には、大なり小なり人間の手が加わっている。あるいは元来、人は自然の一構成者にすぎない。そして私たちが日常目にする「自然」は、大なり小なり人の手を受けて成立してきた「自然」なのである。そこから人の手を排除するなら、目の前の「自然」は早晩、その姿を変えてゆくことだろう。

(佐藤 洋一郎『里と森の危機』より)

注 ※生態学…生物の生活に関する科学。

※マタギ…狩猟を中心に山間部で暮らす人々。

※アンタッチャブル…ふれてはいけないこと。

問一 線部 a・b 「れる」と同じ意味を含むものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 先生がみんなの先頭に立って歩かれる。
- イ 宿題をせずに母に注意される。
- ウ 思い出の場所に行くと昔が思い出される。
- エ 学校までは十分ほどで行かれる。
- オ 寒い日には温かい飲み物がよく売れる。

問二 A C に当てはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度使うことはできません。

- ア だが イ たとえは ウ また エ だから

問三 線部①「ふたつの状況」とはどのような状況ですか。本文中から二点ぬき出しなさい。

問四 線部②「こうした特殊性」とありますが、「竹林」の「特殊性」の説明として適当なものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 雑草が生えやすく、幼樹はすぐに枯れてしまう。
- イ 季節による見た目の変化に乏しい。
- ウ 限られた種類の昆虫や動物しか生活することができない。
- エ すぐに山崩れを引き起こしてしまう。
- オ 他の植物との共存を拒否する。
- カ 人の手がなくなると、すぐに土地にあった森に回帰する。

問五 線部③「経済的価値に見向きもされなくなつて」とありますが、竹林の経済的価値に見向きもしなくなるとは、人々が何をしなくなるということですか。本文中の言葉を用いて答えなさい。

問六 本文最初の 線部 X 「森が荒れる」について、次の I、II の問いに答えなさい。

I 「森が荒れ」てしまったのはなぜだと筆者は考えていますか。「くから」に続く形で本文中から二十五字以内でぬき出しなさい。

II また、人はなぜ「森が荒れる」という印象を持つのだと筆者は考えていますか。「くから」に続く形で本文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問七 線部④「私のイメージを打ち砕いてしまった」とありますが、「工藤さん」の話聞いて筆者の「白神の森」へのイメージはどのように変化しましたか。それを説明した次の文の【 A 】【 B 】に当てはまる言葉を考え、それぞれ二十字以内で答えなさい。

筆者は、白神の森は【 A 】と想っていたのに、実は【 B 】というところを知った。

問八 線部⑤「私はそこに疑問を抱いている」とありますが、ここから読み取ることのできる筆者の考えとして最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 世界遺産に指定されたことで、マタギではない他の人が白神の森に立ち入ることになるので、森を護ることはできない。
- イ 世界遺産に指定されたことで、多くの観光客がやってきて白神の原始の森を結果的に破壊することになってしまう。
- ウ 世界遺産に指定されたことで、白神の森はマタギの手から離れることになり、その結果森を護ることができなくなる。
- エ 世界遺産に指定されたことで、マタギたちはすることがなくなってしまう、その結果として生活が立ちゆかなくなる。
- オ 世界遺産に指定されたのは「自然の森としての白神」であるのに、マタギの手が加わっているので、真の自然ではない。

問九 この文章で筆者は「自然」というものをどのように考えていますか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 「自然」とは人と対立する存在で、人を排除することでしか守ることができないと考えている。
- イ 人という存在を全く寄せつけないものだけを「自然」と言うことができると考えている。
- ウ 人が一構成者という立場をこえて支配することで、「自然」は存続することができると考えている。
- エ 私たちの考える「自然」は人の影響を受けて成立しているものであると考えている。

オ 目の前の「自然」は人の手から離れるとすぐに汚染からも解放されると考えている。

【三】 「ぼく（優太）」は中学三年生。かつてはサッカー部のエースでしたが、現在は足を痛め、部活動からは遠ざかっています。そんなとき、水泳部顧問の「ウガジン」から、級友の「姫（岡本）」、「モータ次郎」とともにトライアスロン大会への出場を勧められます。以下はそれに続く場面です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「じゃあ、今日のところは帰りますね。失礼しました」

姫が職員室の出口へ向かった。ぼくとモータ次郎も続く。ところが、ウガジンが※トライアスロン大会の申込書をひらひらさせながら追いかけてきた。

「ちよつと待て、おまえら。これをよく見てみる。この第一回桜浜ジュニアトライアスロン大会はな、たくさんの参加者を募るためにいろんなローカル・ルールがもうけられているんだよ」

「ローカル・ルール？」

なんのことだかわからずに、ぼくは聞き返した。

「簡単に言えば、この桜浜の大会だけの特別ルールだ。今大会にはそのローカル・ルールのひとつとしてリレー部門があるんだよ。スイム、バイク、ランにひとりずつ出て、リレーをするんだ。つまり、三人ひと組のチームとして参加できるんだよ」

「なるほど、それならばおれがスイム担当で出りやいってわけですね」

姫がさつそく飛びついた。

「さすが岡本。話ののみ込みが早い」

ウガジンは拍手で姫を褒めたたえる。姫はモー次郎の肩をたたいた。

「おまえはいつも自転車で牛乳配達してるからバイク担当でいいよな」

「もちろん。自転車なら自信があるよ。毎朝三時間は自転車に乗ってるからね」

「三時間か。すげえな。オーケー。それじゃ、ラン担当は優太ということで」

「ちよつと待てよ」

話がどこまでも勝手に転がっていきそうなので、ストップをかけた。

「なんだよ優太」

「勝手に決めるなよ。トライアスロンに出場するなんて、ひと言も言っていないだろ」

①そもそもぼくはひとり三競技どころが、一競技どころが、最初から出るつもりはなかった。

「いいじゃんか。おれを助けると思って出てくれよ」

a こともなげに語りかけてくる姫を無視して、ウガジンに詰め寄った。

「先生はぼくのヒザが悪いことを忘れたんですか。ちよつと走るくらいならいいですけど、優勝なんて絶対無理ですよ。もし優勝したいんだったら、ぼくをメンバーからはずしてください」

「おい、優太」

b 出し抜けに姫に腕をつかまれて、職員室の外まで連れていかれた。

「痛いな。なんだよ」

姫の手を振りほどく。

「落ち着けよ。冷静になれつて。いいか？ おれの水泳部復帰のために優太を巻き込んだのは悪いと思ってるよ。でもな、ウガジンはおれの復帰の条件として、トライアスロン大会への参加を言ってきただけなんだよ」

「うん？」

「つまりな、優勝しなきゃ駄目とは言つてないだろ」

② そう言われればそうだ。

「おれたちはトライアスロン大会に参加すればそれでいいんだよ。優太はただ走ってくれるだけでいいのさ。そもそも、トライアスロン大会は※全中のあとなんだぜ。全中に出られさえすれば、そのあとのトライアスロン大会でビリを取ろうが、途中で

棄権しようが、関係ないってことだよ。学校がなくなるんだかなんとか知らないけど、卒業してしまうおれたちには関係ないよ。おれたちはただ出ればいい。わかったか」

たとえランパートだけにしても、ヒザの悪いぼくがトライアスロン大会に出るわけにはいかない。クラスのやつや、サッカー部のやつらに、出場することを知られたら都合が悪い。なんだよ走れるんじゃないか、なんて後ろ指を差されることになる。ぼくのヒザは壊れたことになっているのだ。

「やつぱり無理だよ。ヒザが悪いから」

苦笑いで断った。すると、姫の顔から表情がさつと消えた。視線はぼくの目に固定されたまま一ミリも動かない。そして、そのひとみ

瞳

がぞくつとするとほど冷たいのだ。一瞬にして鳥肌が立った。姫がこわい。

たしかモト次郎が言っていた。姫は真つ黒い心を持っていて、キレたらとんでもないことをするにちがいないと。悪魔みたくに見えるとも言っていた。

③ いま、この瞬間、モト次郎の言葉がとてつもなく真実味を帯びて感じられた。

「おまえさ、もう猿芝居はやめろよ」

冷たくて乾いた声だった。

「なにが芝居なんだよ」

「ヒザが悪いなんて嘘をつくのはやめろ」

一瞬、息が止まった。

「嘘じゃないよ」

「本当は痛くなんかないんだろ」

「痛いけど我慢してるんだよ。痛くないふりをしようって努力してるんだ」

ぼくは左ヒザをさすった。

「ちがうだろ。痛いふりをする努力をしてるんだろ」

「そんなことないよ」

「言い訳はしなくていいぜ。前から思ってたんだけどさ、嘘ついているのミエミエだぜ」

「いかげんなこと言うな」

「いかげんなのは優太だろ。ヒザが痛い、痛いつて言うわりにはよ、帰りのホームルームが終わった瞬間にダッシュで帰ってるじゃん。おかしいだろ。というかさ、きっとクラスのやつらもおかしいつて気づいてるぜ。気づいてないのは優太自身だけじゃないのか」

④ 血の気がさつと引くのが自分でもわかった。

「なあ、優太。おまえ、なんか逃げたいことがあるんだろ。そのためにヒザが痛いつていう言い訳を用意してあるんだろ。ちがうか」

「そんなんじゃないよ。本当に痛いんだ」

「去年からおまえには水泳部に来てもらってるわけだけどよ、おまえのタイムどんどんよくなってたぞ。どっか故障してるとは思えないくらいにさ」

「適当に話を作るなよ」

「おれタイム計ってたもん。それに、おれくらい水泳を長くやれば、泳ぎ方を見ただけでも故障を抱えてるかどうかくらいわかるもんさ」

思わずあとすさりした。姫は今までぼくのヒザがなんともないことを知っていながら、ずっと黙っていたというのか。⑤くぞ。な
んてやつだ。

「ぼくは本当にヒザが痛いんだ。マジで走るのは無理なんだ」

「なんでもかんでもすぐに無理だ、無理だつて言いやがって」

姫がさらになじり寄ってくる。

「どうしたおまえら。いつまでも廊下で」

がらりと職員室のドアが開いて、ウガジンが出てきた。助かった。ウガジンに泣きつく。

「先生。やっぱりランパートは無理です。トライアスロンには出られません」

「でもなあ……」

「なんなら、ぼくが必ずかわりのランパートを探します。それじゃ駄目ですか」

姫の視線をひしひしと頬に感じつつ懇願した。ウガジンがためらう。

深く頭を下げてから顔を上げると、ウガジンの後ろに担任の星村先生の姿が見えた。どうやら、こちらのやり取りが気になって様子を見に来たようだ。⑥いまこの状況で事情をよく知らない星村先生は天使に見える。天使に頼み込む。

「星村先生。明日の帰りのホームルームで、トライアスロンのランパートに出てくれる人を探したいんです。いいですか」

お願いします、と深々と頭を下げる。

「いいよ」

ぼくが嘘をついているなどはまったく気づいていない星村先生はやさしく答えてくれた。やつと安堵の息をつく。⑦欄を見ると、娘が冷やかな目でぼくを見ていた。

(関口 尚^啓 『空をつかむまで』より

)
注 ※トライアスロン…スイム(水泳)、バイク(自転車)、ラン(ランニング)の順に三種目を連続して行うレース。通常は一人で全てを行う。
※全中…全国中学校体育大会。

問一 線部 a 「こともなげに」、b 「出し抜けに」の意味として最も適当なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア 品のない様子で

ア いち早く

イ 自信のない様子で

イ いきなり

a 「こともなげに」 ウ 落ち着きのない様子で

b 「出し抜けに」 ウ おさえつけるように

エ 何の問題もない様子で

エ 乱暴に

オ 穏やかでない様子で

オ いらだたしげに

問一 線部①「そもそもぼくはひとり三競技だろうが、一競技だろうが、最初から出るつもりはなかった」とありますが、これはなぜですか。本文中の言葉を用いて六十字以内で説明しなさい。

問二 線部②「そう言われればそうだ」とありますが、本文最初からここまでの「ぼく」の心情の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の意志とは無関係に話を進める周囲の雰囲気にとまどい、冷静さを失ってしまうが、姫から詳しい事情を聞くことで、
、
落ち着きを取り戻し、話の流れに一応納得している。

イ 自分の意見を無視する方向に話が進んでいることに驚き、周りの友達への不信感がつのるが、姫から真意を聞くとともに姫への信頼感を取り戻している。

ウ 自分の考えを聞きもしないで勝手に話を進める周囲の人たちにあきれはて、その場を立ち去ろうとするが、それを止める姫から話を聞いても大会出場の話には興味が持てないでいる。

エ 自分の存在を無視して次々に話を決めていく友人たちに反感を覚え、大会の話をするのがいやになっていたが、姫の話を聞くことで参加することも悪くないと感じはじめている。

オ 自分の意見をはつきりと主張するものの、それが受け入れられずつい身勝手な行動をとってしまうが、姫の計算高い本心を

聞き、あらためて姫を見直しは始めている。

問四 線部③「いま、この瞬間、モト次郎の言葉がとてつもなく真実味を帯びて感じられた」とありますが、このとき「ぼく」はどのようなことを感じたのですか。その内容として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 姫はどんな手を使っても水泳部に復帰したいと考えているということ。
- イ モト次郎は実は姫のことをあまりよく思っていなかったということ。
- ウ 姫は怒ったら何をするかわからない恐ろしい人間であるということ。
- エ モト次郎が毎朝三時間かけて牛乳配達をしているのは大変だということ。
- オ ぼくの態度が、隠していた姫の本当の姿を表に出させたのだということ。

問五 線部④「血の気がさつと引くのが自分でもわかった」とありますが、これはなぜですか。四十字以内で説明しなさい。

問六 線部⑤「くそ。なんてやつだ」とありますが、ここでの「ぼく」の気持ちの説明として最も適当なものを次の中から
選り、記号で答えなさい。

- ア 信頼できると思っていた姫が、ぼくの嘘を必要以上にあげきたてようとする事に対する悔しさ。
- イ 水泳が得意なだけあって、ぼくの嘘をたやすく見破ってしまったということに対する尊敬。
- ウ 友達に姫ならぼくの嘘をかばってくれると信じていたのに、それを裏切られたことに対する失望。
- エ ぼくの隠している事情に気づいた姫が、必要以上に気を遣ってくれていることに対する気まずさ。
- オ 友達だと思っていた姫が、実はぼくの嘘を見抜きながら、それを言わずにいたことに対する恐れ。

問七 線部⑥「いまこの状況で事情をよく知らない星村先生は天使に見える」とありますが、このように感じたのはなぜで
すか。三十字以内で説明しなさい。

問八 線部⑦「横を見ると、姫が冷やかな目でぼくを見ていた」とありますが、このとき「姫」が「ぼく」に抱いていた気持ちはどのようなものですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分でかわりのメンバーを探すとはつきりと言いきった「ぼく」に対する期待。
- イ あくまでもしらししい嘘をつきとおそうとしている「ぼく」に対する軽蔑。
- ウ 「ぼく」が探してもランパートのメンバーなど見つからないというあきらめ。
- エ 一人だけ大人を味方につけ、先生にほめられている「ぼく」に対するやきもち。
- オ 「ぼく」と違い、自分は正々堂々とトライアスロンに出場するという新たな決意。

問九 本文の内容と表現の特徴の説明として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学生と大人とのだましあい話を話の中心にして、中学生たちの純粋さを際立たせている。
- イ 中学生たちのありふれた日常を、登場人物それぞれの視点から多角的に描き出している。
- ウ 会話を多用することによって、中学生たちの学校生活を生き生きと描き出している。
- エ ぼくと姫との敵対関係を描くことで、人が理解し合うことの難しさを浮き彫りにしている。
- オ トライアスロン大会への出場を通して、主人公が人間的に成長する様子を描いている。

【一】

問一	①	②	③	④
	⑤	⑥	⑦	⑧

問二	①	②	③	④	⑤
----	---	---	---	---	---

問三	①	②	③	④	⑤
----	---	---	---	---	---

【二】

問一	a	b	問二	A	B	C
----	---	---	----	---	---	---

問三	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">•</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">•</div>
----	---

問四	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>
----	--

問五	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>
----	--

問六	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;">I</td> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>	I																																								
I																																										

問七	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;">II</td> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>	II																																								
II																																										

問七	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;">A</td> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>	A																																								
A																																										

問七	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;">B</td> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>	B																																								
B																																										

問八	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>	問九	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>
----	--	----	--

【三】

問一	a	b
----	---	---

問二	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>																																									

問三	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>	問四	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>
----	--	----	--

問五	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>																																									

問六	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>
----	--

問七	<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 5%;"></td><td style="width: 5%;"></td> </tr> <tr> <td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td> </tr> </table>																																									

問八	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>	問九	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px;"></div>
----	--	----	--

--

【一】

問一	① そかく	② びんじょう	③ もんこ	④ よわね
	⑤ 専門	⑥ 貧富	⑦ 衛星	⑧ 縦断

問二	① 未	② 非	③ 不	④ 非	⑤ 無
----	-----	-----	-----	-----	-----

問三	① ア	② ア	③ ウ	④ イ	⑤ エ
----	-----	-----	-----	-----	-----

【二】

問一	a ウ	b イ	問二	A イ	B エ	C ア
----	-----	-----	----	-----	-----	-----

問三	・ スギやヒノキを植林したものの、そのまま放置されてしまった状況
	・ 竹林が拡大し、森を侵食している状況

問四	エ	オ	(順不同)
----	---	---	-------

問五	タケノコを採らなくなるということ
----	------------------

問六	I	本	来	人	の	手	の	入	っ	て	い	た	森	に	、	人	の	手	が	入	ら
		な	く	な	っ	た	か	ら													

II	森	の	変	化	が	、	人	の	目	に	は	汚	く	映	っ	て	し	ま	っ	た	か	ら
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

A	人	の	手	が	加	え	ら	れ	て	い	な	い	原	始	の	森	だ					
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--	--	--	--

問七	B	マ	タ	ギ	の	人	た	ち	が	手	を	加	え	た	里	山	で	あ	っ	た		
----	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	--	--

問八	ウ	問九	エ
----	---	----	---

【三】

問一	a エ	b イ
----	-----	-----

問二	ヒ	ザ	が	悪	い	こ	と	に	な	っ	て	い	る	の	に	、	ト	ラ	イ	ア
	ス	ロ	ン	大	会	に	出	場	し	た	ら	、	ク	ラ	ス	や	部	活	の	や
	っ	ら	に	後	ろ	指	を	差	さ	れ	て	し	ま	う	か	ら	。			

問三	ア	問四	ウ
----	---	----	---

問五	自	分	の	嘘	は	ば	れ	て	い	な	い	と	思	っ	て	い	た	の	に	、
	み	ん	な	知	っ	て	い	る	と	指	摘	さ	れ	た	か	ら	。			

問六	オ
----	---

問七	先	生	が	き	た	お	か	げ	で	こ	の	場	を	ご	ま	か	す	こ	と	が
	で	き	る	と	考	え	た	か	ら	。										

問八	イ	問九	ウ
----	---	----	---

問 次の文章を読んで、筆者の考えをまとめ、あなたが「壁」を乗り越えた経験について

六百字以内で述べなさい。

どんなに順風満帆に見える人生でも、必ず壁はある。成功している人や物事がうまく運んでいる人ほど、それまでに大きな壁を越えてきたと信じていい。壁を越えない限り、成長はないからだ。

しかし、これまでに越えたことのない壁を目の前にしたとき、人が怖じ気づくのも事実だ。でもどんな人も壁を乗り越えながら日々暮らしている。

たとえば誰しもが最初は自転車に乗れない。三輪車に親しんできた子どもなら、車輪が二つしかないものの上に乗ることに、こわい、できないと怖じ気づくのも当然だ。

でも、最初は誰かに後ろを支えてもらっていたものが、いつのまにか後ろの支えがなくても乗れるようになる。

どんなものでも、最初は怖いと思う。でも、何度かやっているうちにできるようになった、面白くなった。そういうものだ。

未知のものを目の前にすると、恐怖をいただく。それは自然な感情だ。

けれど、最初に感じた恐怖がいつのまにか快感になっていることはよくあることだ。自転車に乗れて風をきる快感。その快感が長く続いたせいで、最初から快感だと思いこんでいるだけだ。

最初は誰でも恐れやためらいを感じたはずだ。その恐れを克服し、自転車で最初に一メートル進んだ時のうれしさ、そこから生まれた自信を思い出すのだ。

その一メートルが五メートルになり、何十メートルまで伸びていったのだ。

自転車と、人生で立ち向かうものとは違っただろうと反論する人がいるかもしれない。しかし、それは違う。何事も上達する過程は同じだ。未知の世界に向き合い、克服する。それだけだ。

どんなに複雑に見える物事も、ひとつひとつほぐしてみれば、単純なものでできている。それをひとつひとつ克服し、小さな快感を積み重ねていく。

複雑に、難しくしているのは、偏見、思いこみという自分の感情だ。

これは自分には難しすぎる、苦手な分野だからうまくいかないに違いない、やったこともないのにできるはずなんかない……そんな感情がじゃまをしているのだ。

行き詰まったときには、そのつど自信のカケラを思い出す。最初に乗れた一メートル。

自信の核となるものは、それらの断片だ。それらの小さなカケラに、小さな自信という布を重ねていく。

最初から何メートルも自転車に乗ることを考えると体はすくむ。だから、最初は目の前のすぐにできること、一メートルから始めてみるのだ。

(西谷昇^{しやう} 一 『壁を越える技術』より

)